

保育者養成と演奏技法（Ⅱ）

－ ピアノ初心者対象の入学前教育の取り組み －

奥 千恵子

四天王寺大学紀要
大学院 第16号
人文社会学部・教育学部・経営学部 第55号 2013年3月
短期大学部 第63号
(抜刷)

保育者養成と演奏技法 (Ⅱ) —ピアノ初心者対象の入学前教育の取り組み—

奥 千恵子

(要旨)

S 大学では、AO 入試や推薦入試による入学予定者を対象とした「プレエントランス・ガイダンス」を、毎年 10 月から 2 月にかけて行っている。その際、筆者が所属する短期大学部保育科では、アンケートによるピアノ習熟度調査を実施し、一人ひとりの習熟度に合わせて入学までに練習する課題曲を提示して、ピアノ学習への積極的な取り組みを促してきた。

しかし、ピアノ経験のない入学生が増加してきたため、経験のない、もしくはそれに等しい入学予定者を対象として入学前に指導を行う「ピアノ初心者向け講座」を平成 23 年度から開設することとなった。

拙稿は、講座受講生の入学後までの歩みを辿ることにより、この講座の意義を探るとともに、保育者養成校におけるピアノ初心者に対する指導のあり方に反映させようとするものである。

キーワード：保育者養成・入学前教育・ピアノ初心者・ピアノ指導

はじめに

保育の道を目指そうと決めた者にとって、ピアノ経験の有無は、養成校入学後の学生生活に大きく関わる。

幼い頃からピアノを習い続けている者は、既に保育技術の一つ手に入れたに等しいと言っても過言ではない。ピアノが弾けることを生かして保育の道を選ぶ者も多くいる。一方、たとえ経験がなくても、保育職への道を決めた時点からピアノを習える環境にあり、時期も早ければ、その学びは順調となるであろう。しかし、決めた時期が早くてもピアノを習える環境にない者や、決めた時期が遅い者にとっては、入学後のピアノ演奏技能習得は「保育者になる」という目標到達のために、避けては通れない険しい道となってくる。

他の保育科目においては、学修のスタートラインは入学時に平等に与えられているが、ピアノだけはそうではない。にもかかわらず、「保育者になる」という目指すゴールは同じである。保育科に入学するピアノ初心者学生の重圧は、初めてのピアノ学修に対する緊張に加え、定められた期間内に、ピアノ歴を持つ同級生と同じ目標に向かわなければならないところにある。S 大学短期大学部保育科の平成 23 年度退学者は 3 名で、全員がピアノ初心者であった。退学は進路変更や健康上の理由ではあったが、学生生活におけるピアノ練習の占める負担の大きさが伺われる。

ここに、「プレエントランス・ガイダンス」に参加した入学予定者対象に行った意識調査アンケートの結果がある。アンケート調査実施日は、第1回平成22年10月30日、第2回12月11日、第3回平成23年2月5日である。各回の初参加者合計106名に、「現在ピアノに対してどのようなイメージを持っていますか。」と質問したところ、99%が「楽しそう」、93%が「難しそう」との回答であった。また、第3回目の全参加者81名のじつに94%が、「ピアノを弾くことに対する不安」を抱えていることがわかった。その内訳は、「楽譜が読めない、読むのが苦手だから」39名、「リズム感や音感がないから」19名、「友達や授業についていけないかどうか」16名、「指が動くかどうか自信がないから」9名、「人前でピアノが弾けるかどうか」8名、「ピアノをやったことがないから」7名であった。(複数回答あり)

その中で最多の「楽譜が読めない、読むのが苦手だから」と、次に多い「リズム感や音感がないから」は、「ピアノを弾くことに対して」というだけでなく、「音楽に対して」ということにもなってくる。音楽に対する苦手意識を持ってしまう要因には、小学校・中学校時代の9年間にも及ぶ音楽の授業が関係しているのではないかと思わざるをえない。「音楽に反応する力を育てず、知識や技術を音楽の実態から切り離して習得させようとした」(注1)結果ではないだろうか。しかもその中にピアノ経験者も含まれているということは、スパルタ式レッスンで「ピアノを弾くことが、義務であったり労働であったりして」(注2)嫌いになったり、やめてしまった、という経緯も浮かび上がってくる。あるいは、保育者を目指し習い始めたが、成人してからのピアノ学習の難しさを既に味わっているのかもしれない。養成校入学前のピアノに対する不安は、ピアノ経験者ですら例外ではない。まして、初心者にとっての不安の大きさは想像される。「ピアノは楽しそうで、難しそう」というイメージは、「ピアノは弾ければ楽しそうだが、弾けるようになるには難しそう」ということであろう。

保育者を目指す時期は、様々である。ピアノが弾けないのは学ぶ機会がなかっただけで、本人の非ではない。最初から音楽が嫌いな子どもはいないように、最初からピアノが嫌いな学生もいない。入学時のピアノ経験の有無にかかわらず、ピアノ学修を通して音楽の素晴らしさを知ることが、保育者になるという志を実現するために入学してくる全ての学生に、平等に与えられなければならない。「音楽の道を踏みはずし、音楽の贈り物を享受できない生徒が、一人でもあってはならない」(注3)のである。筆者が考える、養成校のピアノ指導教員に求められるものについては、「保育者養成と演奏技法—保育指導としてのピアノ奏法」(注4)にて述べたとおりである。

果たして入学前教育「ピアノ初心者向け講座」は、どこまで力になれるのであろうか。

1. ピアノ初心者向け講座

(1) 講座の概要

ピアノ初心者向け講座の受講生は、入学前教育として実施している「プレエントランス・ガイダンス」でピアノ習熟度調査を行い、以下の3つの要件に該当する者を選抜した。

- ① ピアノ経験が全くない。

② 独学で練習している。

③ 幼児期に習ったことはあるが、その後のブランクが長く、受講を希望する。

平成 23 年度の該当者は、全入学者 126 名中の 19 名であった。

講座実施日は、平成 23 年 2 月 26 日・3 月 5・12・19 日の計 4 回であり、受講生は入学後の初回授業 4 月 8 日もしくは 11 日より約 1 か月半早く、ピアノ授業のスタートラインに立つことになった。

第 1 回（全体講習）は、基礎的な音楽理論・読譜の仕方・ピアノ演奏技法の基本を講義と演習形式で行い（資料 1）、第 2～4 回（個別指導）は、「バイエルピアノ教則本」（以下、バイエルと略）の保育科指定曲を進めた（資料 2）。自宅にピアノを所有しない者もいるため、9：30～16：30 電子ピアノ練習室（ML 教室）を開放することとした。隣接するアップライトピアノで 15 分間個別指導を行った後、約 45 分間～1 時間、電子ピアノによる各自練習をはさんで、再度 15 分間個別指導を行った。全体講習は筆者が、個別指導はピアノ授業担当教員 1 名と筆者で行い、電子ピアノの各自練習には音楽担当教員 1 名がサポートを務めた。

なお、第 1～4 回ともに、全体講習の復習として基礎的な音楽理論のプリント（注 5）を自宅学習用として配布し、次回に前回の解答を渡して自己採点をするよう指導を行った。

（2）個別指導（講座第 2～4 回目）での受講生の進捗

バイエルの開始番号は、第 1 回全体講習の終了時、各自に「プレエントランス・ガイダンス」で提示した課題の進捗を再調査して決定した。受講生の歩みを辿る上であくまでも一つの目安として、まずは「どれだけ弾けるようになったか」を調べてみた（検証資料 1）。

一人の合格曲数は、1 日では 1～8 曲、計 3 回の指導では 3～14 曲と非常に幅があり、個人差が大きいことがわかる。

指定曲第 1 曲目の第 8 番から開始したのは 5 名であり、その中でピアノ歴が 3 か月ある受講生は第 1 回目の指導で 8 曲合格し、合格曲数の多さでは 5 名中一番であった。しかし、最終回までの 1 日平均の合格曲数で調べると二番目となり、一番目はピアノ歴を持たない受講生であった。つまり、2 回目、3 回目になってくると、ピアノ歴のなかった受講生が肩を並べるようになったということである。この辺りの番号では、たとえ幼い頃にピアノ経験がなくても、目標を持ち、環境に恵まれれば、本人の努力次第で上達は可能かと思われる。

また、講座最終日の到達曲から開始番号を振り返ると、全出席で 53 番に到達したのが 4 名（全員ピアノ歴なし）で、それぞれの開始番号は 8 番、18 番、29 番、48 番、とこれも幅がある。特に 48 番から始めた受講生は、19 名中で一番少ない合格曲数 3 という結果で終わっている。その要因としては、本人の適性と努力以外にも考えられる。バイエルの開始番号は、進捗再調査で「〇番まで弾けました。」という受講生本人の申告番号通りに決定したため、「弾けた」基準は自己判断に任せることとなった。この受講生は、早く進みたい気持ちが先走り、実際には実力が伴わないまま「弾けたつもり」に過ぎなかった、あるいは自己流の良くない練習の癖がついてしまっていたのかもしれない。無理して早く進もうとしたために、逆に進捗は停滞してしまうケースもあるからだ。そもそもピアノ経験がない者にとって、「弾けた」という意味が

わからないのは当然であろう。

課題設定は非常に難しく、かつ、重要である。と共に、改めて独学の難しさを感じる。頑張るだけでピアノは弾けるものではない。「新しい習慣をつけるよりも、良くない習慣を変えることの方がよっぽど大変」(注6)であり、どのように弾くのか知ってから正しく練習しなければ、上達は遠回りになる。

全体講習 1 回と、僅か 3 回の指導で判断をするのは危険ではあるが、ピアノ歴と「ピアノが弾ける」ことは必ずしも一致しないことにも気づかされる。

2. 講座の意義

(1) 気持ちが動いた：心～目には見えない成長

ここで、講座受講生に講座を振り返って書いてもらった感想を採り上げる。

*受講する前のピアノに対する気持ちはいかがでしたか。

弾けるかどうか不安でいっぱいだった。(8名) / ピアノを習ったことがなくてずっと習いたかったので少し楽しみでした。(2名) / 難しいというイメージしかなかった。(2名) / 無理だ、嫌だとは思ってなかった。 / 「弾けない」という気持ちが大きくありすぎて、自分は「できない」「上手に弾けない」とばかり思っていた。 / まったくの初心者だったので人よりも練習しなくてはいけないと思っていた。

受講前のピアノに対する不安が伝わってくる。平成 24 年度受講生 (入学生 111 名中 21 名) に最終日の個別指導後に行ったアンケート調査でも、回答者 16 名中 13 名が受講前の気持ちに「不安」を挙げている。「厳しく指導されるのかな？とドキドキしました。」という声もあった。

*受講した感想はいかがでしたか。

楽しかった。(2名) / 先生が丁寧に教えてくれて安心した。頑張ろうと思った(2名) / 楽しく教えていただいた。 / どんどん弾けていくことに楽しさを感じた。 / 不安が少しなくなった。 / あって良かったと思う。 / 初めてピアノを弾く私にたくさん教えてくれたので基本からすることができた。 / 少しピアノが楽しくなった。 / 入学までに少しでも弾けるようになって進むことができてよかった。 / とても先生方は優しく、わからないことなどもいろいろ教えてくださって、練習しないと上手になれない、と改めて気づいた。 / 入学前に真剣にピアノと向き合うことができた。

受講して、ピアノに対する不安が消え、前向きの意識が芽生えている。できなかったことができるようになった喜びと楽しさが伝わってくる。平成 24 年度受講生も、講座修了後の不安は 2 名のみ (家にピアノが無い。 / 講座がなくなると合っているかわからない。) となり、不

安を乗り越え、やる気になったのが明らかとなった。「絶対に弾けないと思っていた私でも、頑張って練習したら少し弾けるようになったので、苦手なものから楽しいものになった。」「練習すれば弾けるようになれるという自信が持てるようになった。頑張ろうと思える。」「進めるか不安でしたが、教えてもらって、一生懸命練習しようという気持ちに変わりました。」「今は不安というよりも、やらないあかん、って気持ちが強い。」という感想もあった。

意欲は、嬉しい経験から湧いてくる。「音楽的成長の原動力は、発達の経験である。」（注7）とマーセルが言うように、初めてのレッスンで、その後のピアノとの関係が決定される。ピアノを弾くのが楽しいと思えるか、これから頑張ろうと思えるか、全てがこの最初の時にかかっている。不安を抱えながらも、楽しみにしている者もいるのだ。

「日本のピアノ教育界においては、弟子がもっぱら自らの師匠のみを仰ぎ見、師匠の型を模倣することがすなわち『上達』であるとされ、『心を無にして、師の教え通りに』、『楽しんでではない、苦しまねばならない』という『お稽古事』としての根性主義的な発想があった。」（注8）と、大地宏子は述べている（『日本の道徳観とピアノ教育』）。同様にカヴァイエも、日本人のメンタリティーにも関係するとして、「教師と生徒のあいだに、大人のコミュニケーションが存在しないようです。・・・まるで軍隊における上官と兵士との関係のようで、およそ芸術する行為とは無縁です。」と、教師が一方的に断定し、生徒は盲目的に従う日本人のレッスンの様子を指摘する（注9）。納得いくような説明もせずに、ただただ練習するように求める。これでは、初心者でなくともピアノが好きにはなれない。しかも、「この指導形態では、指導者が求めるのはまず『ノーミスでしっかり弾ける』ことで、音楽をするための手段である『技術』がいつのまにか『目的』と化してしまう」（注10）危険性がある。初めてのピアノ学修に対する不安の中には、「厳しく指導されるのかな？」と指導に対する不安もあるのは当然だが、受講生には、ピアノを弾くことは勿論、レッスンが楽しいと感じてほしい。ピアノとのコミュニケーションのみならず、指導者とのコミュニケーションを楽しむ、それが「協同の学び」としての本来の音楽づくりであり、いつしか保育者としての表現力にも繋がっていくのではないだろうか。

保育者を目指す初心者学生が、初めてのピアノレッスンを楽しいものと感じれば、ピアノが上手な保育者になって、子どもたちにも音楽の楽しさを伝えたいという目標を持ってくれるだろう。尾崎喜八は、唱歌の先生によって音楽を愛する心が深くしっかりと植えつけられ、それは生涯にわたり幸せな影響を与えたと、その著書の中で美しい記憶を語っている（注11）。学生の講座でのピアノとの出会いは、子どもたちの園でのピアノとの出会いとどこか重なる。学生が指導される立場から指導する立場になったとき、子どもたちへ音楽の楽しさを伝えられるか否か、指導教員の責任は重い。

気持ちが動くためには、重要な要素がもう一つある。それは仲間の存在である。当然ながらここでは全員が初心者である。入学後のようにレベル別の班分けもなく、「弾ける人」と自分を比較するプレッシャーもない。最初から自信を失うこともなく、のびのびと練習できる。仲間と学ぶことにより、安心感と連帯感が生まれる。第1回目の全体講習では、受講生は最初緊張した面持ちであるが、すぐに和やかな雰囲気になってくる。個別指導の前後に練習する教室は、全員が同室で電子ピアノを使用する。皆、真剣そのものである。周りの音こそ聞こえてこない

が、練習中の番号や頑張っている気配がお互いに伝わり、良い意味での刺激になっている。バーンスタインが指摘するように「孤独は、おそらく練習を妨げる大きな障害」(注 12) だろう。練習しないと上達できない、しなければならぬと解ってはいても、現在の自分の能力に無力感を持つと自分自身に負けてしまうものである。できないのも不安なのも自分だけではないということを体感し、仲間との練習でお互いに勇気と刺激をもらい、時には励まし合いながら、やる気に繋げてもらえることも大きな成果である。

このように、講座には、1 曲でも多くバイエル番号を進めること、という以上の教育的意義がある。ピアノ経験のある同級生より、1 か月半早くピアノ授業のスタートラインに立てているという気持ちの余裕を持ち、通常の授業より時間も回数もかけた指導を受け、練習の仕方をじっくり学べる環境に身を置いた 4 日間の意義は、たとえすぐに成果が出なくとも必ずや生かされると確信する。何よりも、4 月からの大学生活に対する様々な不安の中で、一番大きなピアノに対する不安を少しでも和らげ、春休みに遊びやアルバイトの代わりに練習を頑張った、入学前に真剣にピアノと向き合うことができたこと、胸を張って開講に臨んでもらえるのではないだろうか。

(2) 指が動いた：技～目に見える成長

初心者向け講座開設までは、開講後第 1 回目の授業で全員が班分けのための演奏をする際、「弾けません。」と恥ずかしそうに名乗るだけの学生が、僅かであるが毎年必ずいた。ピアノが弾けない保育科入学生は、それだけで引け目を感じているであろう。しかし、講座を始めた平成 23・24 年度、いずれも全員が弾くことができた。受講生にとって講座の意義は、入学前に「読めなかった楽譜が読めるようになった。」「弾けなかったピアノが弾けるようになった。」ということである。入学時、講座を受講した学生は初心者であっても、もう未経験者ではない。

しかも、1 (2)「個別指導での受講生の進捗」でまとめたとおり、受講生により個人差はあるものの、講座での進捗は入学後のそれより速い。1 (1) で述べた講座の形態や配慮によると思われる。そのねらいをまとめた。

① 個別指導を 30 分間続けず、15 分間ずつ 2 回に分けたこと。

- ・初めてのピアノ個人レッスンで 30 分間は、過度の緊張から疲れて集中が保てないであろう。レッスンが苦痛になっては「ピアノが嫌い」意識を生んでしまう。まずは集中が保てる短めの時間が望ましい。
- ・しかし、せっかく参加してもらった以上はレッスン時間 15 分では短い。
- ・指導での注意点が実際に理解できているかを練習後に確認できれば、1 週間後まで待たずにその日に仕上げて次の課題に進めるだろう。
- ・読譜力が十分に身につけていない状態では、自力で次週までの新しい課題練習は厳しい。特に、リズムは一旦間違えてしまうと正しく直すのには相当な努力を要し、そこから苦手意識を持ってしまうことも多い。各自の練習で次週までの課題の読譜をした後、その日の 2 回目の指導で確認しておけば、1 週間正しく練習してもらえる。

② 電子ピアノの各自練習には、音楽担当教員 1 名が練習中のサポートを行ったこと。

- ・初心者は一人で練習することには慣れておらず、“声かけ”をして励ます。これは個別指導の教員も積極的にかかわる。
- ・受講生が練習中に感じた疑問にすぐ対応する。
- ・ヘッドホンで練習しているため音は聞こえないが、タッチを見ることで、テンポやリズムの間違い、そして姿勢や手の形などの奏法を指導する。
- ・ピアノ練習の仕方を身に付ける“援助”をする。

以上は講座ならではの進め方であり、通常の授業内でこのような環境を整えることは難しいと思われる。

入学後のピアノ授業は、講座とは全く異なる。一人が指導を受けられる時間は平均 12～13 分位と短い上、その中でバイエルの他に弾き歌い曲（資料 3）の指導も受け、もしも発表会形式の小テストで不合格になれば、再指導の曲をもう一度受け直すこととなる。必然的に読譜は自力で行わなければならない、基礎を持たない、あるいは読譜が苦手な初心者学生には非常に厳しい。「練習できなかった」という言い訳の中には、「楽譜が読めないし、練習の仕方がわからなくてできなかった」という意味合いも含まれるだろう。

その上、学生側にも入学後の事情がある。他の講義がほとんど毎日のように 1～5 限まで入っているため、練習時間の確保が物理的にも体力的にも厳しくなってくるのだ。そこに、通学やクラブ活動にアルバイトの時間、そして、下宿や寮生活のため練習は学校でしかできないという学生も出てくる。「楽譜が読めないし、練習の仕方もわからないし、時間もつくれなくてできなかった」となってくる。

たった 1 か月半であるが、入学前と入学後では、指導形態も学生の生活状況、つまり練習の環境も全く異なってくるのだ。

（3）真の成長：内から外へ

目には見えない成長と目に見える成長とは、互いに切っても切り離せない関係にある。

弾けなかったものが弾けるようになると楽しい。楽しいとやる気が出て練習する。練習するとどんどん進める。進めると好きになる。一旦好きになると壁に当たっても頑張れる。合格をもらって新しい曲に進めることは楽しみであり、自信とやる気に繋がる。一方、いくら練習しても弾けないと嫌になる。嫌になると練習から逃げたくなる。逃げていると進めない。進めないと嫌いになる。嫌いになると諦めてしまう。ピアノの練習において、技術は心と常に繋がっていて、殊に初心者では進歩の有様はメンタル面に非常に影響される。気持ちが動かないと体も動かないのである。そこに指導教員の援助が必要であることは言うまでもない。初心者を導く教員には、特に「ケアの心」、「保育マインド」がなくてはならないだろう。「教え子」である学生にとって、教員は「育ての親」ともいえるのだから（注 13）。（2）②は、決して技術のためだけではない。

ここで重要なのは、ピアノの学びは進度が全てではないと、学生には初めから教える必要が

あるということだ。ややもすると曲の番号が進むことが目的となり、周りと比べて焦る学生が出てくる。番号が進むことは励みにしても、それが目的ではないことを初心者であっても、いや初心者であるからこそ説かなければならない。ピアノの練習は人との競争ではなく、ピアノを弾くということは、ピアノという楽器を使って音楽を表現することであり、「音楽すること以外のなにものでもない」(注 14) ことを。進もうとして、速く弾いて弾き直してばかりいる学生には、常に美しい音を求め、決して焦らず、ゆっくり丁寧に練習することの大切さを説き続けたい。

筆者は、ピアノを一生懸命練習する初心者学生を見ていると、幼な児の世話をする保育者の尊い姿に重なることがある。これまでピアノを弾くために使ったことのない指を一本一本精一杯動かし、思い通りにならない指に時には折合いをつけながらも「ピアノを弾く手」を育み育てている姿が、あたかも新人保育者に見えてくるのだ。ハイハイから、つかまり立ちをしてよちよち歩きへと、昨日できなかったことが今日はできる、今日はできないことでもある日突然できるようになる、そんな子どもの成長過程を、まさにバーンスタインの著書の原題“**With Your Own Two Hands**”(注 15)のごとくに「自分自身の二つの手で」味わい、発見している気がしてならないのだ。だからこそ、『すぐに速いテンポで練習しないこと！』・・・絶対に無理をしないこと！身体に難しさを感じさせてはいけない。(注 16) ののである。

3. 受講生の歩み

練習から得るものは、進度だけではない。マーセルが繰り返す言うように、練習した者だけが手にできる、かけがえのないものがある。

ここで、講座受講生の入学後、1 年生 7 月末、初めてのピアノ定期試験終了後の感想シートから抜粋してみる(資料 4)。

*今日の演奏を振り返って

練習では弾けていたのに弾けなくて悔しい。(3 名) / 緊張で手が震えて練習では弾けていたのに途中でつまってしまった。練習も本番のつもりでしないといけないと思った。 / 間違っても諦めなかった。手が思うように動かなくて悔しい。もう一回やり直したい。 / 緊張すると弾けなくなる。 / 緊張してすごく速く弾いてしまった。 / いざみんなの前に立つと全然弾けなくて音もめちゃくちゃに弾いてしまった。

*音楽 I を振り返って成長できたと思う点

楽譜が読めるようになった。(4 名) / 全く弾けなかったピアノが両手で弾けるようになった。 / 指が動きにくかったのがしっかり動くようになった。でも発表の時手が震えるのもっと緊張に慣れないといけないと思う。 / ピアノが好きになった。 / 最初はピアノ全くできなくて、指にも肩にも力が入ってしまって音が痛かったが、今はやさしく弾けるようになった。 / 1 曲弾けるようになるまでの時間が短くなった。 / 指がカチカチで音がとぎれてしまうのがなくなった。 / ピアノを弾けたときの喜びを感じることができた。

＊音楽Ⅰを振り返って反省点とその理由

思った以上に苦戦した。練習時間をもっととるべきだった。／努力を怠ったから、前にあまりすすめなかった。／練習不足だと思うし、それでレッスンで先生に迷惑かけたと思うのでしっかり練習していきたい。／緊張したら思い通りに弾けないから慣れないといけない。／教えてもらうのを頼りにしてあまり自分で覚えようとしなかったことと、練習時間の短さが反省するところだと思う。

＊夏休みの目標・音楽Ⅱへの決意

暇さえあればピアノを弾いているぐらい練習しようと思います。／毎日1時間以上練習する。30分しかできなかった次の日は多めに弾く。楽譜を見ながら弾けるようになる。／できるだけ諦めずに練習することと楽しんでピアノができるようになりたい。／ただ“弾く”だけではなく、上手に弾くみんなのように感情などの表現ができるようになりたいです。ピアノは人よりかなり遅れをとっている分、人より何倍も練習しなければならない！と1セメで実感したので、今やるべき“ピアノ”を頑張ろうと思います！

ピアノ歴5か月の学生の声である。人前で普段通り指が動かないもどかしさ、実技試験の厳しさに直面しながらも、成長の手応えと喜び、更なる意欲がひしひしと伝わってくる。「誠実な練習が必要だということを生徒にはっきり自覚させたのは、何よりも演奏体験だった。・・・クラス全体が個々のメンバーの上達に触発されるようになった。」（注17）とバーンスタインは言う。学生は人前での演奏ごとに自らを振り返り、練習の必要性に自ら気づき、自ら伸びていく。故に、「教えるということは、生徒がもともと裡にもっているものをいかに彼らが自分で伸ばしていけるか、その手助けをすること」（注18）に他ならないのである。

この学生たちの更に1年後、2年生7月末、学内最後のピアノ定期試験時の感想から抜粋する。

＊ピアノの学習を振り返って、今思うことを自由に書いてみてください。

皆に比べるとまだまだ下手だが、ピアノを弾くことができなかった自分がソナチネの曲を弾けるとは全く考えていなかった。ここまで弾けるようになったのは、先生方に指導して頂き、また自分も自分なりに努力したからだと思う。これからも練習を続けていきたい。ご指導ありがとうございました。／楽譜すら読めなかった段階から始まって、今は少し強弱をつけたりもできるし、練習すれば上手になるんだと実感している。／私は1年の時からよく泣いていた記憶があります。友達や先生に心配もかけたと思いますが、いつも泣いた後はすごくやる気が出ていつも以上に頑張れます。結果になかなかつながらないですが、これからもコツコツ頑張ろうと思います。／今はピアノを弾くことが楽しくてもっと練習して上手になりたいと思うようになった。再履修で取り戻せるようこの夏休み練習頑張りたい。／2セメの時は自分が弾けないことにイライラして、練習することから逃げていたけど、3セメでは自分の実力を受け止めて練習する意欲が出たと思う。楽譜も読めるようになったし、指も動かせるようになった。少しは成長したと思う。／ピアノの練習は正直大変でした。他の教科の課

題や実習の準備などで後回しにしてしまい、テスト前に焦ることが多かったけど、ここまで弾ける力をつけてくれた先生方には感謝の気持ちで一杯です。

「ピアノ初心者」という肩書はもういらない。単位修得、未修得を超えた大きな成長が伝わってくる。学生から教えられることに感動すら覚え、感謝の言葉に胸が熱くなる。

講座を受講した学生がこの日を迎えるまでの道は、感想の言葉に滲み出ているように決して平坦ではなかった。保育科でのピアノの学びは、採用試験を視野に入れて経験者と同等に求められるため、その歩みは非常に困難を伴うものであったに違いない。

講座受講生の入学後の進捗調査をするに当たり、その比較対象として、講座を受講しなかった学生の中から、受講した学生と入学時同レベルのピアノ経験者を選抜した（検証資料2）。1セメスター音楽Ⅰの単位修得結果は、受講した学生より悠に優位であった（検証資料3）。しかしその半年後、2セメスター音楽Ⅱになると、単位未修得者数は一気に増加して受講した学生のそれを超え（検証資料4）、そのまた半年後の3セメスター学内最後の試験では、「バイエル修了」や「ソナチネアルバム到達」という目に見える進捗結果で、1セメスター時の単位修得結果は逆転したのだ（検証資料5）。入学時、バイエル70番台から開始しても修了せず、単位未修得であったピアノ経験者がいる中で、受講した学生では、バイエル40番台から開始して単位修得・ソナチネアルバム到達を叶えた学生もいた。そこに至る学生の意識は、これまでに採り上げた感想シートで明かされたとおりである。我こそはピアノ初心者という「ピアノ初心者向け講座」で学んだ学生たちが、決して挫けることなく、粘り強く努力の階段を一步步昇ってきた真実と自信が、心からの言葉とこの結果を生んだのだ。それはまさに「依存から自立へ、自立から自己実現へという人間の生涯発達のプロセス」（注19）をピアノ学修によって学んだともいえるのではないか。

大怪我を乗り越えたピアニスト、パスカル・ドゥヴァイヨンは、音楽表現のためのテクニックを学ぶのに必要なことは「探し求め続ける、という姿勢。それこそが、練習の原動力となり、更には人間としての成長を促すことになる。それと忍耐、忍耐、そして忍耐。」と述べている（注20）。ピアノ技能の習得を頑張ったことは、人としての成長に繋がっている、温かい保育の心が育まれていると改めて確信する。頑張ってもなかなかできない子どもの頑張りを認め、できずに泣いている子どもに黙って寄り添い、諦めず頑張ろうという気持ちになれるよう支え続ける、そんな心優しい保育者に彼ら彼女たちこそきつとなってくれる。ピアノを学ぶことで、同時に保育の心を学んでほしいという筆者の願いは通じている。1か月半の真の意味は、講座終了後にまでその指導が続くところにある。

この講座は、ピアノが弾けないことで保育の道を諦める高校生がいないようにという趣旨で開設されたものであるが、4回程度の指導で果たして成果が出せるものかと、筆者こそ不安であった。しかし、今ははっきりと言える。「ピアノ初心者向け講座」は保育の原点そのものであり、そこで得るものはどんなピアノ歴にも優るものがあると。「ピアノが弾けない＝保育者に向かない」とは言い切れないと。しかしながら、学生の前には、採用試験という高い壁が立ちばかり、それを越えてもなお、現場で求められる「実践的な技術」という更に高い壁が学生を待ち

受けている。筆者のジレンマは続く。

4. これから

「ピアノ初心者向け講座」の意義を考察してきた中で、まず感じた今後の問題点は、講座受講生の選抜方法である。受講生は、1（1）で述べたとおり、習熟度調査を判断の基準にし、併せて個別面談も行い選抜した。しかし、「〇歳から習っています。」「ピアノ歴〇年です。」といっても、どのような指導を受けていたか、そして練習の質まではわからない。ピアノ歴の中にはいかに当てにならないものがあるか、今回再認識する結果となった。「現在は習っていないが、過去に習った経験があり自主練習できる自信がある」、「保育科進学を決めた段階から習い始めたので、講座受講を希望しない」、という入学予定者をどのように判断するか、再考の必要がありそうだ。

次に、第1回目の全体講習についてである。楽譜が読めないという受講生に入学までの短期間に読譜力をつけてもらおうと、全体講習ではバイエルを使って音楽理論の基礎を講義し、個別指導でも自宅学習用のプリントを配布して読譜学習を促した。その成果は、入学後のピアノの進度に反映されたといえるだろう。2 セメスターの音楽理論でも、123 名中、再試験 5 名の中に講座を受講した学生は該当しなかった。しかし、音高は読めるようになったとはいえ、楽譜に「ドレミ」を書き入れて「音が読める」と言うような学生も中にはおり、“ソルフェージュ指導”の必要性を痛感するに至った。また、リズムがとれない、あるいは正しいかどうかかわからないという学生の声が多く、ひいてはそれが練習のつまずきにもなっていることから、独学では習得しにくいリズム指導も行いたいと考えている。「はじめに」で引用したマーセルの言うことを忘れてはならない。いくら限られた時間であっても、まず「聴く」力をつけ、身体でリズムを感じて模倣・表現することにより音符との関連を理解するような指導、つまり幼児教育に不可欠な“リトミック教育”を視野に入れていきたい。しかもこれらは、初心者学生の読譜力に限られた問題ではなく、初見奏の力をつけることにも関わることから、講座のみならず、学生の音楽指導における今後の研究課題の一つとしたい。

初心者向け講座を検討するための調査研究であったが、得たものはそれ以上となった。

何よりもまず、講座受講生の比較対象とした同レベル学生の進捗から浮かび上がった、ピアノ経験者の中で伸び悩む学生の問題である。受講生と殆ど同じバイエル番号の曲から開始した学生の到達度は、ソナチネアルバム中～上級曲からバイエル未修了までと二極化し、結局、2 年生 7 月の時点でバイエル未修了の学生 5 名全員が、入学前にピアノ経験があり講座を受講しなかった学生であった。講座の意義が明らかになる反面、大切なのはピアノ歴の年数でも始めた時期でもなく、その内容であることを改めて考えさせられる。子どもの頃のピアノに対する苦手意識をいかに払拭させるか、成人してからピアノ技能習得の困難さを味わってしまった学生にはいかに勇気づけるか、その上で、どうすれば正しい基礎に導き直せるのか、講座受講生の指導以上に極めて厳しく、難しい問題である。先に述べた受講生の選抜方法にも関わってくる。

受講した学生と、受講しなかった入学時同レベルの学生は奇しくも3セメスターで同数となり、進捗比較は興味深いものがあった。また、学生全体の意識を探るために全学生の試験時感想シートを読み返してみると、一人ひとりの個別指導での記憶と相まって、次のようなピアノに対する意識パターンが見えてきた。

ピアノを弾くのは嫌いだが、練習は必要なのです。	ピアノを弾くのが好きで、練習も楽しくて好きだ。
ピアノを弾くのは嫌だし、練習も嫌いでしたくない。	ピアノを弾くのは好きだが、練習は嫌いだ。

「焦らずコツコツとつづけると、ある日突然、目の前の扉が大きく開くときが来る。そして練習の面白みが一気に増える。これが一步成長した瞬間だ。開けた扉の向こうには、10枚、その先には100枚と次の扉が待っており愕然とするが、不思議とそれを開けていくことが楽しみになっていく。」(注21) 村田理夏子は練習の楽しさを、このように表現している。

保育者を目指す学生にとって避けては通れないピアノ技法をどうすれば音楽表現として学べるのか、初心者学生であっても練習を義務としてではなく心から楽しむことはできないのか、というのが筆者にとってピアノ指導の核であり、全ての学生を、右上のグループに導くことが最大の使命と考える。学生に求めるからには、まず筆者自身が右上のグループであることを、指導を通して学生に伝えたい。実際、教員である間、ずっと学び続けなければならない。

また、「練習」を「指導」に置き換えると、上の表は教員側にも当てはまり、先に引用したドゥヴァイヨンの言葉は、「学生の指導に必要なこと」とも言い換えられる。いかに音楽が素晴らしい芸術であるか、ピアノが音楽を表現するのに素晴らしい楽器であるかを、演奏のみならず、指導において学生に伝えることこそがピアノ教員の責務である。しかし、指導において、特に初心者の指導において困難はつきものである。音楽への愛と感謝、学生への愛情と信頼だけでは乗り越えられない。教員が右上のグループであり続けるためには、教えることに対する強い愛情がなければならない。それでも、時には教員も挫けそうになる。その時支えてくれるのは、他でもない音楽と、そして学生である。「教師が生徒の最高の力を発揮させうるのと同様、生徒も教師に対して同じことができる。・・・関係というものはすべて相互作用によって活発になるもので、・・・教師を触発するもっとも効果的な方法は、練習である。」(注22) 練習から逃げて逃げてどうしようもないと思った学生が、愛情持って粘り強く練習の必要性を説き続けた結果、遂に練習してきたときの喜びは、自分自身の演奏の喜びにも匹敵するものである。学生の上達と成長、達成感に満ちたその笑顔は、何よりも筆者を勇気づけてくれるのだ。

おわりに

初めての「ピアノ初心者向け講座」を開設して1年5か月。ピアノの授業は終了し、単位という結果が出た。しかし、本当の結果はまだ出ていない。結果というのが採用試験の結果であるとすれば、それはもう目の前である。しかし、講座受講生一人ひとりのこれまでの、そして保育者としての未来への限りなき歩みこそが、目には見えない真の結果をもたらすのではないだろうか。養成校のピアノ教員にとって、学生にピアノの単位を取得させることや採用試験に合格させることは、目的でもなく結果でもない。勿論それらは責任であり、非常に重要ではあるが、通過点に過ぎない。なぜなら「教師が学生に、後々まで残る音楽とピアノの道標をあたえるということ」こそが、学生の卒業後にまで続く教員の真の責任であり、「自分がしたことによって音楽と学生の双方が良いものを得つつある、その時にこそ教師は初めて、本当に成功したと宣言することができるのである。」（注23）からだ。

筆者は、養成校の一音楽教員として、微力ながら、やむに已まれぬ想いで講座での指導に当たった。2年目を迎え、想いは更に強いものが残った。「今までどれだけ早く進んで皆に置いて行かれないようにするかと急いで練習していたけど、そうじゃないことを教えてもらったのが私の中で大きくて、皆と同じ教室で練習できて、とても良かったです。ピアノを頑張ろうと改めて思いました。」平成24年度講座終了時アンケートでの、一受講生の感想である。想いは届いていた。

ピアノ初心者向け講座受講生が初めて足を踏み入れた「ピアノを弾く」という終わりのない道。それはまさに、美しくて深い保育の森へと通じる道そのものであった。

(資料)

1) ピアノ初心者向け講座 第1回全体講義用レジメ

第1回ピアノ講座

—音楽を感じる心に経験者と初心者の区別はない—

奥 千恵子

13:30 はじめに 「ピアノ弾く」ということ＝ピアノで音楽を表現する

ピアノで音楽を表現するために必要な技術は？

第1部「楽譜を読む」

1. 見えない音を残すために・・・

音の長さを表すために生まれたのが「音符」

音符が「五線」に乗ると高さを表す

2. バイエル8番を使って「楽譜」を知ろう！

楽譜の中には道路標識がいっぱい

14:20 休憩・質問

14:30 第2部「思い通りに指を動かす」

1. 楽譜と鍵盤の関係

上下と左右

数字がミソ

2. ピアノを弾く基本

演奏スタイルで決まる

3. 練習の仕方

「急がば回れ」「忍耐あるのみ」

4. 『リスのないしょばなし』バイエル8番をみんなで弾こう！

15:30 まとめ 「目は楽譜 指は鍵盤 耳は音」

1. 第2回目（個別指導）までの課題提示

2. 自宅学習用のプリント配布

16:00 終了

2) 平成23年度 バイエルピアノ教則本課題曲（原著番号）

8・10・15・18・19・20・29・31・47・48・52・53・57・59・66・77・72・73・78・84・85・88・
89・80・81・82・96・91・93・98・100・102・104

3) 小林美実（1975）『こどもの歌200』『こどもの歌200（続）』 チャイルド本社

4) S大学ではセメスター制を実施しており、短期大学部保育科のピアノ学修は、1年次は1セメスター：
音楽Ⅰ、2セメスター：音楽Ⅱ、2年次では3セメスター：教育実習指導（ピアノ）となっている。

（検証資料）

1) 初心者向け講座受講生のピアノ歴とバイエルの進度（原著番号）

受講生	ピアノ歴	第1回個別指導	第2回個別指導	第3回個別指導
1	なし	8	10・15	18・19
2	なし	8・10・15	（欠席）	18・19・20・29
3	なし	8・10・15・18	19・20・29	31・47・48・52・53
4	なし	8・10・15・18・19・20	29・31・47・48・52・53	（欠席）
5	小学校4年生から3か月程度	8・10・15・18・19・20・29・31	47・48・52	53・57・59
6	なし：独学で10番まで	15・18・19	20・29・31・47	48・52
7	なし：独学で15番まで	18・19	20・29・31・47	48・52・53
8	なし：独学で15番まで	（欠席）	（欠席）	18・19・20・29・31・47
9	なし：独学で18番まで	19・20・29・31	47・48・52	53・57・59・66
10	なし：独学で19番まで	（欠席）	（欠席）	20・29・31
11	なし：独学で20番まで	29・47	48	52・53
12	なし：独学で20番まで	29・31・47・48・52	（欠席）	53・57
13	なし：独学で31番まで	47	（欠席）	48・52・53
14	なし：独学で31番まで	47・48・52	（欠席）	53・57
15	4歳から7歳	47・48	52・53	57・59・66
16	なし：独学で47番まで	48	52	53
17	小学校低学年に半年間	（欠席）	52・53・57	59・66・72
18	なし：独学で57番まで	59	（欠席）	66・72・77
19	なし：独学で90番まで	96	98・99	100・102

2) 入学時、バイエル50番台から開始した13名と、70番台から始めたが1・2セメスターで単位未修得の2名を合わせた計15名であった。

3) 1セメスター音楽Ⅰ単位未修得4名：講座を受講した学生3／16名、受講しなかった学生1／15名

4) 2セメスター音楽Ⅱ単位未修得15名：講座を受講した学生7／16名、受講しなかった学生8／15名
 受講しなかった学生8名の内訳は、3名が、幼少時にピアノ経験があるが入学まで3年以上ブランクのある学生（3／49名）であり、5名が、保育者を目指し高校入学後あるいは保育科合格が決まってから習い始めたという、入学前のピアノ歴6か月～3年未満の学生（5／31名）であった。幼少時習っていて一旦やめたが、保育者を目指しレッスンを再開した学生8名は、全員単位取得であった。

5) 3セメスター教育実習指導（ピアノ）定期試験時の演奏曲

講座を受講した学生15名中	バイエル100番まで	0名
	バイエル100番台	1名（バイエル修了）
	ブルグミュラー25練習曲	5名
	ソナチネアルバム	9名
講座を受講しなかった学生15名中	バイエル100番まで	3名
	バイエル100番台	2名

奥 千恵子

ブルグミュラー25 練習曲 3 名
ソナチネアルバム 7 名

(注・引用文献)

- 1) ジェームス・L. マーセル (1971)『音楽的成長のための教育』音楽之友社 p.58～59
- 2) ロナルド・カヴァイエ 西山志風 (1987)『日本人の音楽教育』新潮選書 p.82
- 3) マーセル 同上書 p.301
- 4) 奥 千恵子 (2009)「保育者養成と演奏技法—保育指導としてのピアノ奏法」四天王寺大学紀要第 48 号
- 5) 田村智子・岩瀬洋子 (2010)『わかるワーク』全音楽譜出版社
- 6) 宇治田かおる (2011)『からだで変わるピアノ』春秋社 p.21
- 7) マーセル 同上書 p.118
- 8) 岡田暁生 (2003)『ピアノを弾く身体』春秋社 p.94～99
- 9) カヴァイエ 同上書 p.241～242
- 10) 岡田暁生 同上書 p.90
- 11) 尾崎喜八 (1992)『音楽への愛と感謝』音楽之友社 p.20
- 12) セイモア・バーンスタイン (1999)『心で弾くピアノ—音楽による自己発見』音楽之友社 p.27
- 13) 網野武博・無藤 隆・増田まゆみ・柏女霊峰 (2006)『これからの保育者にもとめられること』ひかりのくに p.11
- 14) カヴァイエ 同上書 p.119
- 15) バーンスタイン 同上書 表紙
- 16) バスカル・ドゥヴァイヨン (2011)『ピアノと仲良くなれるテクニック講座』音楽之友社 p.28～29
- 17) バーンスタイン 同上書 p.25
- 18) 寺西春雄 (1993)『やわらかな音楽教育』春秋社 p.108
- 19) 網野武博・無藤 隆・増田まゆみ・柏女霊峰 同上書 p.19～20
- 20) ドゥヴァイヨン 同上書 p.142
- 21) ドゥヴァイヨン 同上書 p.142
- 22) バーンスタイン 同上書 p.23
- 23) ボリス・ベルマン (2009)『ピアニストからのメッセージ』音楽之友社 p.261

(参考文献)

ベネット・リーマー (1987)『音楽教育の哲学』音楽之友社
中村明一 (2010)『倍音—音・ことば・身体—の文化誌』春秋社
中山靖子 (2009)『ピアノ演奏法の基本—美しい音を弾くために大切なこと』音楽之友社
山岸麗子 (1986)『頭で弾くピアノ—心を表現する手段』音楽之友社
クラウディオ・ソアレ (2007)『演奏と指導のハンドブック』株式会社ヤマハミュージックメディア
バリー・グリーン ティモシー・ガルウェイ (2005)『こころのレッスン—あなたの音楽力を 100%引き出す方法』音楽之友社
小澤征爾・堤剛・前橋汀子・安田謙一郎・山崎伸子編 (1999)『齋藤秀雄講義録』白水社

- 高萩保治（2003）『音楽学習のフロンティア』玉川大学出版部
- 井上直幸（1998）『ピアノ奏法—音楽を表現する喜び』春秋社
- ジャン・ファシナ（2004）『若いピアニストへの手紙—技術をみがき作品を深く理解するために』音楽之友社
- 『最新ピアノ講座 2 世界のピアノ教育とピアノ教本・3 ピアノ初歩指導の手引Ⅰ・4 ピアノ初歩指導の手引Ⅱ・5 ピアノ実技指導法』（1981）音楽之友社
- 高倉弘光（2005）『音楽・からだで感じる授業づくり—豊かな感性が支える確かな力』東洋館出版社
- エトヴィン・フィッシャー（1977）『音楽を愛する友へ』新潮文庫
- 熊谷雄二（2010）『音楽の子ども』言叢社
- 倉橋惣三（2008）『倉橋惣三文庫③育ての心（上）』フレーベル館
- フランシス・ウエーバー・アロノフ（2007）『アロノフ先生のリトミック教室』ドレミ楽譜出版社
- エミール・ジャック＝ダルクローズ（2003）『リズムと音楽と教育』全音楽譜出版社
- L.チョクシー/R.エイブラムソン/A.ガレスピー/D.ウッズ（1994）『音楽教育メソッドの比較』全音楽譜出版社

